

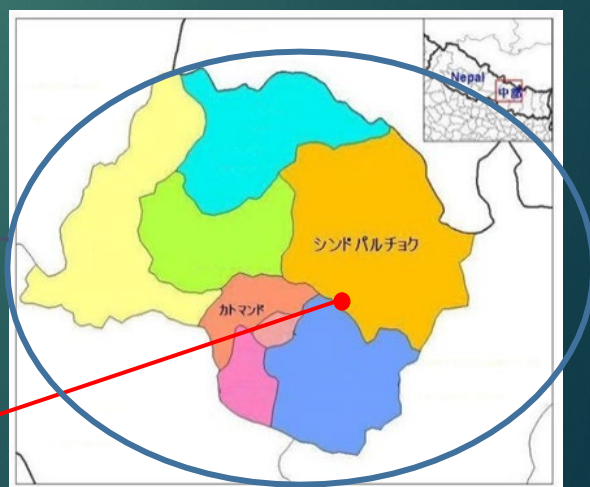
2023年度NGO活動状況調査報告



共同養豚場の看板前にて、豚の飼育を行う住民、当財団職員（後列中央）及びJAFSメンバー（後列左側）

2024年3月10日（日）～3月14日（木）までの5日間、当財団職員2名がネパールを訪問し、NGO活動状況調査を行いました。今回は、バグマティ州シンドゥパルチョク郡インドラワティ村（地図参照）で、家畜小屋の設置を行うことにより、家畜を飼う費用を捻出できない貧農の人たちが家畜の飼育を開始できるようにする活動と、子どもたちの栄養摂取状況の改善のため栄養教育に取り組んでいる「公益社団法人アジア協会アジア友の会（JAFS）」を調査対象といたしました。

本NGOは、現地において住民の希望を理解し、住民自らが課題解決に取り組む姿勢をサポートする活動を実施しています。お忙しい中、調査にご対応いただき心から感謝申し上げます。



活動地：インドラワティ村

1. 活動の概要

ネパールでは、急しゅんな地形、インフラの未整備、農業技術指導不足などの問題により農業生産性が低く、農村部の貧困が深刻化しています。特に活動地の村では、赤土の土壌と高地性気候により栽培可能な作物が限定され、収量も低く抑えられているため、年間収入2万ルピー以下の人が多く、若い男性の出稼ぎによる人口流出が続いています。こうした状況に加え、2015年のネパール地震では大きな被害が生じ、多くの人々に影響が出ました。医療も十分でなく、栄養豊富な食料の摂取も難しい中、男性の出稼ぎにより、母親たちが零細農業と子育てを一人でこなしています。

こうした中、アジア協会アジア友の会は持続可能な農業の発展と村民の生活向上を目指し、ゆうちよ財団の助成により次のような活動を行っています。

- ① 家畜小屋を設置し、家畜を飼う費用を捻出できない貧農の人たちが家畜の飼育を開始できるようにする。家畜の購入は各世帯が行うことで、飼育の責任を各自が担う。
- ② 豚の飼育方法のステップアップを図るために、飼育方法の基礎の復習や飼育における病気対応などの知識の講習により飼育におけるリスク削減を行う。
- ③ 6歳以下の子どもの体重測定を行い、栄養不良（低体重もしくは過体重）の保護者を中心に3日間の栄養教室を開催し、栄養不良の改善方法や、献立・調理方法などについての栄養指導を行う。
- ④ 子どもについて3ヶ月毎の体重の増減確認、家庭の食事の状況確認調査など、栄養教室のフォローアップを行う。

アジア協会アジア友の会とネパールでの活動展開について

～副事務局長熱田典子さんに聞きました～

——アジア協会アジア友の会は飲料水を欠くインドに井戸を贈る運動からはじまったと聞いていますが、**ネパールで活動を始めたきっかけとその後の活動展開**について教えてください。

熱田さん：アジア協会アジア友の会は、1979年に活動を開始しました。団体が設立した当初からネパールは対象になっていましたが、ネパールで本格的な活動を始めた直接のきっかけは、1991年のネパール南部の村での栄養調査です。調査結果では子どもたちを筆頭に人々のタンパク質や微量栄養素の不足が顕著でした。そこで慢性的栄養失調の改善をめざして、現地の公立小学校1校での給食を実施したのが最初の活動です。同時に養鶏を実施し、誰もがタンパク質を摂取することと共に収入につなげるための活動を行いました。

そういう活動を現地の専門家を活用しながらできたらよかったです。ネパールではそういう制度が今も整っていません。国際支援という形で食糧支援がずっとされてきましたが、支援がある間はよいものの、なくなったら元の状態に逆戻りです。今は栄養学を学んだ人たちとの関係を作ることができたので、そういう人たちに出来るだけ農村地域に行っていただいて、栄養専門家の人たちが持っている知識をその地域の人たちに活用してもらうという仕組みを構築中です。

今回の活動地に関しては、水が全くなくて、農業ができないような状況だったので、ネパール地震が起きる2年前の2013年頃から水支援を始めました。さらに地震で大ダメージを受けたので、その復興支援にずっと関わってきました。2019年に水問題が深刻になってきたので、NGO連携無償資金協力を使ってエリアの人たちが全員が使える水の供給支援を行いました。今、その大規模揚水システムからの水道設置や防災力を高めることによって、地域全体の底上げに取り組んでいます。



活動地で子どもの身長を測っている熱田さん

2. 現地の人々の声 (養豚関係)

——今、やっている養豚は始めてからどのくらい経ちましたか。養豚を始めてから、生活や仕事に何か具体的な変化がありましたか。

ラウトさん：4カ月になります。今まで、牛とヤギを飼ったことがあります。家畜はどれも生き物なので難しい。しかし、やるべきことをちゃんとやることで、きっちりと飼育できていると考えてます。

タパマガルさん：活動が始まる1年ぐらい前からお手伝いをしながら養豚を行っています。牛とヤギを飼ったことがあります。豚の飼育は簡単ではないです。豚はよく食べるので餌をきっちりとやらないと成長しないし、太らせないと商品価値がでません。また病気にならないよう清潔な環境を整えないといけないので手間がかかりますが、努力しながら飼っています。

シュバさん：養豚を始めてから1年程です。他に水牛とか山羊を飼っています。豚の飼育は他に比べて難しい。豚を飼う前に借金があり育てた豚を売ることによってその返済の足しになりました。こういう機会を与えていただいたことに感謝しています。

ニュウマヤさん：養豚を始めてから1年程です。今は豚を売ったところで、私も借金を返済することができ、感謝しています。他に山羊を飼っていますが、豚の飼育はそんなに難しくはなかったです。

——家畜飼育の講習会で具体的なスキルや知識を得ることができましたか。次に講習会を受ける機会には、どのようなことを教えてもらいたいですか。

ラウトさん：今まで飼ったことがある家畜と豚は成長の速度が異なるので、どういう風に成長していくかということや、あとは子どもが生まれるときに必要なケアについて習いました。1頭や2頭という規模ではなく、もっと大きい規模で養豚をするための知識と技術を教えてもらいたいと思います。

タパマガルさん：時間通り餌をやらないといけないとか、清潔な環境を保たなければならないとか、養豚ならではの注意事項を教えてくださいました。今は教えてもらった範囲できっちりと飼育をしたいのですが、機会があれば新しいことをぜひ習いたいと思います。

シュバさん：養豚をするには小屋とか餌とかいろいろ用意が必要で、牛ならば餌を少々減らしても問題はありますが、豚はきちんと餌を与えないとキロ単位で痩せてしまいます。そうならないようにきちんと毎日豚に餌を与えるためには、自分自身の生活もきちんとしないとイケないというのが講習会で得た学びです。

ニュウマヤさん：小屋の掃除の仕方やどんな餌を食べさせたらいいのかしっかり教えてもらいました。そのため豚を飼うことは難しくなかったです。



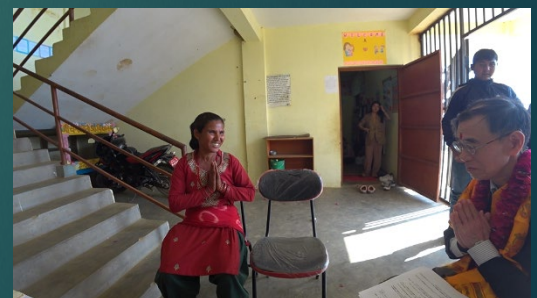
共同養豚場の内部の様子



ラウトさん (左) とタパマガルさん (右)



シュバさん



財団職員からインタビューを受けているニュウマヤさん

——この活動に対する**期待や今後の展望**について教えてください。
また、何か**困っていることや何か改善すべき点**があれば教えてください。

ラウトさん： せっかく習ったことを生かして養豚の規模を拡大していくためにもっと団体から支援があればいいと思います。

シュバさん： 今やっている養豚が拡大できればいいと思います。もうちょっとサポートしてくれるカリキュラムがあったらうれしいです。

ニュウマヤさん： 元手が少ないので、また家畜を飼えるような支援があったらうれしいです。



共同養豚場での子豚の飼育の様子

3. 現地の人々の声 (栄養教室関係)

——子育て世帯への**栄養指導**や**栄養教室**で学んだことで、**日々の食事や生活の中で具体的に取入れたこと**はありますか。

ローマ・シュレスタさん： 習ったおかゆの作り方で作ったら、味が違うので子どももよく食べるようになったとかの変化がありました。今までは食べさせていなかった果物を食事に取り入れたりしています。その結果、子どもの成長がよくなったと感じています。子どもが健康に暮らしていくことは容易なことではないので、こういう栄養のプログラムがあることを有難く思っています。

サルミラ・シュレスタさん： ここで習ったことは全部はできませんが、できる範囲で工夫を始めました。その結果、子どもが病気にかからなく元気にすごせるようになったと感じています。

——この活動に対する**期待や今後の展望**について教えてください。
また、何か**改善すべき点**があれば教えてください。

ローマ・シュレスタさん： 子どもの成長のために栄養のことを今回学びました。子どもがよく成長するために、自分たちや学校のためにも、もっといろんな新しい知識を学べる機会が増えたら、子どもももっと元気に成長するのだろうと思います。

サルミラ・シュレスタさん： 収入が多くないので、子どもがどのくらいまで学校に通わせられるか、高校・大学まで通わせることができるか、そのために奨学金のようなものがあるとありがたいと思っています。



村の小学校で行われた栄養教室の様子



栄養教室に参加したローマ・シュレスタさん(左)とサルミラ・シュレスタさん(中央)



栄養教室に参加したサルミラ・シュレスタさんとお嬢さん

アジア協会アジア友の会現地スタッフにインタビューしました

～レシナ・バジュラチャルヤさんに聞きました～



レシナ・バジュラチャルヤさん

——バジュラチャルヤさんはこの活動の事業進捗確認・報告や事業地における事業調整を担当しておられると聞いていますが、**活動の受益者との良い関係を築いていくにあたり、最も配慮していること**は何でしょうか。

バジュラチャルヤさん：直接受益者を選ぶ前に地元の行政の人たちにアジア協会の活動について理解してもらい、関係を築いてから適切な場所について情報を引き出して、一緒に実施場所の選定を行います。行政からの紹介などで窓口を決めた後は、直接その窓口（栄養の活動では先生）とコミュニケーションを取り、進捗のフィードバックもしながら活動を進めています。

——**当初想定していなかったことや、試行錯誤していること**について教えてください。

バジュラチャルヤさん：まず、思った以上に養豚に対する要望があったことです。若い人たちが村からいなくなって、他に働きに行けないので収入源は農業しかないし、機械がないので、収入を上げる手段として養豚ならば少し年をとっていても取り組めるからです。

栄養教室にしても、今取り組んでいる区は小さいコミュニティなのでここで状況をつかんでスタートしたのですが、この村は全部で12区あって、子どもたちは他でも同じ状況にあるので、限られたリソースのもとで今取り組んでい

る区以外にもどうやって活動を広げていくかについて模索しているところです。

——**住民に何かよい影響**は出てきていますか。

バジュラチャルヤさん：栄養のプログラムははじめは人々になじみが薄かったのですが、講座を受けるたびに具体的な質問が出るようになるなど、関心が徐々に開かれていき意識が変わってきました。この地域では例えばトウモロコシや小麦などの限られた種類の作物だけを食べたり、入手できるようになったビスケットやインスタントヌードルのようなものを食べている子どもの中に、病気になったり、よい太り方ではない太り方をする子が出たりしました。そうしたことをきっかけに植える作物の種類の多様化をはかったり、購入する食べ物も、例えば果物を買って食べさせるようになってきています。

養豚に関しては、まずは収入の増加から栄養の改善につながっていくように期待しています。

こうした活動の機会を与えていただき、うちよ財団に感謝しています。

——この活動に対する**今後の展望**について教えてください。

バジュラチャルヤさん：先日村の12区全部の区長が集まる地方政府のミーティングで、他の区の区長からも、ニーズがあるので是非自分たちの区でもやって欲しいというリクエストがありました。活動を広げることでバランスがとれるし、全体の底上げにもつながっていくので、そういうことができるプログラムになっていけばよいと思っています。

——バジュラチャルヤさん、どうもありがとうございました。

編集後記

今回は、「公益社団法人アジア協会アジア友の会(JAFS)」のネパールでの活動を対象として、直接現地での調査及び取材を行いました。活動地は首都カトマンズから4輪駆動の自動車でも片道4時間ほどのところにあります。カトマンズを出ると舗装されている道路がだんだんなくなり、活動地が近くなるにつれ雨季には交通の途絶が危ぶまれるような悪路が続いていました。活動地の調査・取材にあたっては、アジア友の会の熱田様をはじめ、現地事務所の方々や現地協力者の方々から多大なご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。